



なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



No.25

縄文土器は進化し続けた

1 縄文土器の発見

1877年(明治10年)に、アメリカ人の動物学者のモースが東京品川区の大森貝塚を^{おもりかいづか}発掘した。これが、日本における初めての科学的な発掘調査であり、日本の考古学が近代科学として発足した年になったと言われている¹。

モース(Edward Sylvester Morse)は、明治政府により東京大学の「お雇い学者」として招^{しょうへい}聘された。1877年6月18日に横浜に着いたモースは、翌日^{よくじつ}の6月19日に、横浜から東京に汽車で向かった。モースは車窓から露^{しゃそう}出^{ろしゅつ}した貝殻層^{かいからそう}を目撃した。数日後、モースは東京大学の学生を連^つれて、貝殻層の発掘に取りかかった²。後に、その貝殻層はモースによって、大森貝塚^{おもりかいづか}(Shell Mounds of Omori)と名付けられた。

膨大な量の土器や骨角器などの遺物^{いぶつ}が発見された³。モースは、土器の表面に描^{えが}かれた紋様に注目した。それをモースは「code mark」と表現した。「code mark」は「縄目の紋様」と日本語に翻訳されたので、当初は「縄紋土器」と表された。その後「縄文土器」と表記する学者が現れ、縄紋と縄文の両方が使われるようになった。

2 縄文土器の変化から、人々の生活の進化を読み取ろう

縄文土器が作られていた時代を縄文時代と言う。道具による時代区分の方法である。ただ、縄文土器と一口^{ひとくち}に言っても、様々な色や形のものがあり、地域的にも特徴が分かれる。その原因は、土器の原料になる粘土^{ねんど}の性質の違いによるとも言える。

しかし、縄文時代は1万年も続いた。その間に、製作技術の改良を重ねた結果、次第^{しだい}に進化したと考えることもできる。そして、土器の進化の背景には、生活様式や使用目的の進化、あるいは「使い勝手^{つかい がって}」の向上を求める思いがあったのかも知れない。

縄文土器の変化から、生活様式・使用目的や使い方の進化を読み取ってみよう。

3 縄文土器の進化の特徴

草創期^{そうそうき}から早期^{そうき}までは煮炊き用の深鉢形土器^{ふかばちがた どき}が使われている。前期になると、浅鉢^{あさばち}、

*1 勅使河原彰『縄文時代史』新泉社 2016年 p.69。

*2 E.S.モース著 近藤義郎・佐原真編訳『大森貝塚』岩波文庫 1983年 p.192の解説による。

*3 前掲、E.S.モース著 近藤義郎・佐原真編訳『大森貝塚』p.26。

台付鉢などが加わる。中期には、北陸地方の馬高式土器（火焰土器）や中部・関東地方の勝坂式土器などに代表される、物語性のある装飾文様とともに造形的にも優れた土器が用いられる。さらに後期や晩期になると、簡潔で粗末な文様の深鉢とともに、華麗な文様で飾られた深鉢、浅鉢、皿、壺、あるいは土瓶のような形をした注口土器などが用いられるようになる。その種類や量の豊富さ、文様の精緻さなどは、世界の先史土器のなかで類をみないものである*4。

4 時期区別に縄文土器の代表例を見る

① 草創期(15,000年前～12,000年前)

日本で全体の形がわかる最古の土器は、隆起線文土器である。隆起線文土器のほとんどは深鉢形である(図1)。

世界の森林地帯に住む狩猟・採集民は、深鉢形の土器を用いており、狩猟・採集民の最古の土器も、煮炊きに使った深鉢形土器であ

る。一方、農耕民は、煮炊きに浅い壺形土器を用いるが、農耕民の最古の土器は、貯蔵用の土器である。隆起線文土器は深鉢で、煮炊きに使った痕跡があり、縄文文化は森林地帯の狩猟・採集民文化であることが分かる。



② 早期(12,000年前～7,000年前)

早期でも深鉢土器が中心である。黒い部分は焼けた痕で、煮炊きに使用されたと思われる。平底のものもある(図2)。

装飾は細かい線で描かれていて、隆起



*4 前掲、勅使河原彰『縄文時代史』p.98。なお、「先史」とは、文字による史料が残されることのなかった時代のことをいう。

線文系の土器のような強い凹凸は見られない。

③ 前期(7,000年前～5,400年前)

前期に入ると、浅鉢が増えてくるようになる。深鉢にも多様な形のものが現れるようになる(図3)。

煮炊きだけでなく、貯蔵用にも使用される土器が作られるようになった。

さらに、前期の終わり頃から中期の初めの頃には、多彩な文様と様々な姿をした土器が作られるようになる(図4)。



④ 中期(5,400年前～4,100年前)

中期に入ると、土器の種類が増えてくるようになる。深鉢のほか、台付き鉢・浅鉢、有孔罎付き土器、双口土器などが登場する。装飾も繊細で土器全体に描かれた文様が個性的である(図6)。

また、壺も個性的な形の物が登場する。液体状の物を入れたと推測できるが、何に使われたかは不明である(図5)。



また、この頃には
さいしやう祭祀用と思われる土
 器も多く出土するよ
 うになる。それらの
 ものは日常生活に使
 用したとは思えず、
 何に、どのように使
 ったのか研究者の中
 でも意見の分かれる
 ものが多い。



⑤ 後期(4,100年前～3,400年前)

後期の堀之内式
 の土器では、装飾
 は磨り消し縄文が
 主流になる。しか
 も、立体的な装飾
 は把手や突起だけ
 に限られるように
 なる。深鉢は、大
 きさや器の形で区
 別されるようになる(図7)。



一方、東京都の
 加曽利貝塚で発掘され
 た土器からは、深鉢や
 浅鉢以外の土器も発達
 していることが分かる
 (図8)。

後期では、浅鉢のほ
 か土瓶形注口土器、
 台付き鉢、壺などが見
 られる。とくに、土瓶
 形注口土器は広く流行したようで全国的に発掘される。



また、中期末から後期の遺跡からは、日常生活では使用されない土器が発掘されることが多い。たとえば、山形県宮ノ前遺跡で発掘された「人面付き双胴土器」(図9)などは、おそらく祭祀に使われたものだろうと考えられている。



⑥ 晩期(3,400年前～B.C.800年)

東日本の遺跡で、晩期(縄文文化と弥生文化が重なり徐々に移行する時代かも知れない)^{*5}のものが岩手県九年橋遺跡である。九年橋遺跡から出土した土器は深鉢、壺、鉢、浅鉢、注口土器である。これを見ると、深鉢の文様は簡略化する傾向にある。その反対に、その他の土器はより精緻な文様で飾られる特徴を示している(図10)。



それに対して、西日本の晩期の滋賀県滋賀里遺跡出土の土器は、深鉢、鉢、浅鉢が発掘されている。滋賀里の土器では、一部を除いて深鉢には文様はない。文様があるのは浅鉢に限られるという特徴が見られる(図11)。



*5 縄文文化が突然のように弥生文化になったのではなく、徐々に縄文文化が弥生文化に変化したととらえるべきだと主張する最近の研究結果がある。石川日出志『農耕社会の成立』岩波新書 2010年 p.76。